

者が熱中し、其の大なる費用は信者が寄進するに至つた特別の魅力であつた事は、此の谿谷に立つて容易に推し得るのである。

當時も今日も最も注意を惹くのは二軀の巨像であつて、一は三十五メートル、他は五十三メートルの高さがある(挿圖第八)。二像共に山に掘つた龕の奥行だけに高彫したもので、粗彫の像に石灰の化粧漆喰を被せて仕上げてあるが、之を無数の木釘でもたせたのである。元は赤く塗つて金をおいたのであるが、金が厚いので、小さい方の像について、鑄造した像であると立装三藏は信じた位である。又、其の光輝燦爛たる事をいつて居るのを見ればさも信じ得る所である。之等は損傷を甚しくうけて居るけれども今も相當に感動を與へる。其の釣合の重々しい事や、其の壁の弱い事に批評を加へるまへに、其の作者が、之を成就する爲に忍ばねばならなかつた困難を思ふべきである。凡てを考へた所で、之等を以て紀元三世紀以前とする事は出來ず、従つて、犍陀羅派の餘程降つたものであるとより考へられない。此の印象は、兩像の周圍を調べて見れば一層首肯される。其崖に穿つた數百の洞窟は、支那トル